

中国宋代瓷器標本

—佐賀県立有田窯業大学校旧蔵陶磁器より

藤 井 康 隆

Chinese Song Dynasty Porcelain Specimens
: From Ceramic Collection Formerly Stored by Arita College of Ceramics

Yasutaka FUJII

佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集 第7巻第1号
JOURNAL OF THE FACULTY OF ART and REGIONAL DESIGN
SAGA UNIVERSITY
VOLUME 7, NUMBER 1
June 2023

中国宋代瓷器標本

—佐賀県立有田窯業大学校旧蔵陶磁器より

藤 井 康 隆*

Chinese Song Dynasty Porcelain Specimens
: From Ceramic Collection Formerly Stored by Arita College of Ceramics

Yasutaka FUJII

要 旨

佐賀大学芸術地域デザイン学部が保管する佐賀県立有田窯業大学校旧蔵陶磁器資料より、中国瓷器標本5点を資料紹介する。本資料は、中華人民共和国江西省景德鎮市に所在する楊梅亭窯址で採集された瓷器破片標本である。これらはいずれも小破片であるが、中国陶瓷史の標識窯の日本国内における実物資料である点、宋代に特徴的な文様である嬰戲文をあしらう資料が3点みとめられる点で、学術的な陶瓷標本としての資料的価値をみとめうる。また、同資料中に青花瓷片が1点あることから、従来は宋代までで衰退した窯とみられてきた楊梅亭窯にかんして新たな問題意識を投じる。本資料は、一大窯業生産地・景德鎮における標識窯の盛期とその変転の様相にかかわる意義がある。

1 佐賀県立有田窯業大学校旧蔵陶磁器の概略

佐賀大学芸術地域デザイン学部では、2016年に本学と統合した佐賀県立有田窯業大学校旧蔵の陶磁器コレクションを継承し保管している。同コレクションは、文化財・美術品というよりは、陶磁器工芸の参考資料・サンプルとすることを主な目的として収集された資料である。現代の国内外各地の陶磁器を中心とするが、一部に近代以前の古陶磁および古窯標本を含む。本学部では学生の教育・研究の一環として同コレクションの整理作業と基本台帳作成を進めているが、収集の経緯や場所、旧蔵者などの情報に関する記録が無いものが大半である。

2 対象資料の内容

本稿で紹介する標本資料は、同収蔵品中の中国瓷器片5点である。資料に記された注記から、中華人民共和国江西省景德鎮の窯業遺跡「楊梅亭窯址」の破片標本で、1991年に佐賀県立有田窯業大学校のスタッフが研修旅行で同遺跡を見学した際に表面採集した資料らしいことがわかる。

* 佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域デザインコース
Course of Regional Design, Faculty of Art and Regional Design, Saga University

(1) 青白瓷嬰戲文碗片 [図1]

青白釉をかけ「影青」とも称される青白瓷で、侈口碗片と考えられる。残存高4cm, 復元口径15.3cm以上, 底径5.7cmで、低い圈足が付き、圈足の内側は無釉で溶着物や土色の染みつきがみとめられる。外面に「中国研修旅行景德鎮にて」と記したシールが貼られ、断面にペン書きで「91.10.13. 楊梅亭窯跡 宋時代」との注記がある。見込みから内面全体に片切り彫りで文様が施されている。見込み中央には直径約3cmの円形に無文部分がある。その文様は湖田窯編年第六期すなわち元代早期(江西省文物考古研究所・景德鎮民窯博物館 2007)の遺構である湖田窯95A区F9灰坑出土の青白瓷侈口碗28、江西省宜黄県嘉泰元年(1201)葉九墓出土青白瓷碗、南宋理宗趙昀の淳祐四年(1244)とされる「甲辰年」墨書青白瓷孩兒戲水文碗に近似する(范鳳妹・呉志紅 1983; 江西省博物館 2016)。したがって、本資料は13世紀前半～後半(湖田窯編年第四期～第五期)の南宋青白瓷と推定できる。

嬰戲文碗の残存状態の良好な事例はあまり多くなく、嬰兒の遊戯図像が崩れて形式化した文様の事例を含むため、必ずしも嬰戲文は明瞭でない。また、文様の組み合わせにより嬰兒と水波文(嬰兒戲水文)、嬰兒と蓮花文(嬰兒戲蓮荷文)、嬰兒と花枝文(嬰兒攀花文)といった同種の文様のパターンがみられる(馬嘉璇 2018; 毛小龍・李紹蘭 2009)。本資料は、湖田窯95A区F9青白瓷侈口碗28の文様との共通性が高いことから、嬰兒攀花文碗であると考えられる。

(2) 青白瓷碗片 [図2-1]

青白瓷の碗形器の破片である。復元口径19.2cmで、敞口碗と考えられる。口縁端部を外面側にわずかに肥厚させる。外面に溶着物がある。内外面ともに青白釉をかけ、氷裂文が表れている。胎は灰白色で、釉がけした外観の色調はやや暗い淡灰緑色を呈する。内面の釉下に線刻で文様を施す。その文様は嬰兒攀花文碗と考えられる。外面に「91.10.13 楊梅亭窯跡」と記したシールが貼られている。

(3) 青白瓷碗片 [図2-2]

青白瓷の碗形器の破片で、敞口碗と考えられる。内外面に溶着物がある。口縁端部が外面側に肥厚し突線状を呈する。胎は白色で、内外面ともに青白釉をかけ、外観の色調は淡緑白色を呈する。内面の釉下に線刻で文様を施す。その文様は嬰兒攀花文碗と考えられる。外面に「91.10.13 楊梅亭窯跡」と記したシールが貼られている。

(4) 青白瓷碗片 [図2-3]

青白瓷碗形器の底部の破片である。圈足の復元径5.4cm。胎は白色で、内外面、圈足の内側まで全体に青白釉をかけ、外観の色調は青緑がかった明るい青白色を呈する。本破片の範囲では明瞭な文様はみとめられない。外面圈足部に「91.10.13 楊梅亭窯跡」と記したシールが貼られている。

(5) 青花瓷片 [図2-4]

青花瓷の口縁部片だが、口径の復元値も正確に計測できない程度の小破片である。器種は、碗、高足杯または杯、折沿碟のいずれかと推測する。口縁端部が外へ屈曲し、その屈曲部の内外面に水平線を描く。胎は灰白色で、外面にコバルトで草花の文様を描く。内外面ともに透明の釉がかけられ、表面に氷裂文が表れている。内面に「91.10.13 楊梅亭窯跡」と記したシールが貼られている。小破片であり筆者の能力不足から製作時期を特定することはできないが、明代の民窯青花であると憶測する。



图1 楊梅亭窯青白瓷水波文碗片

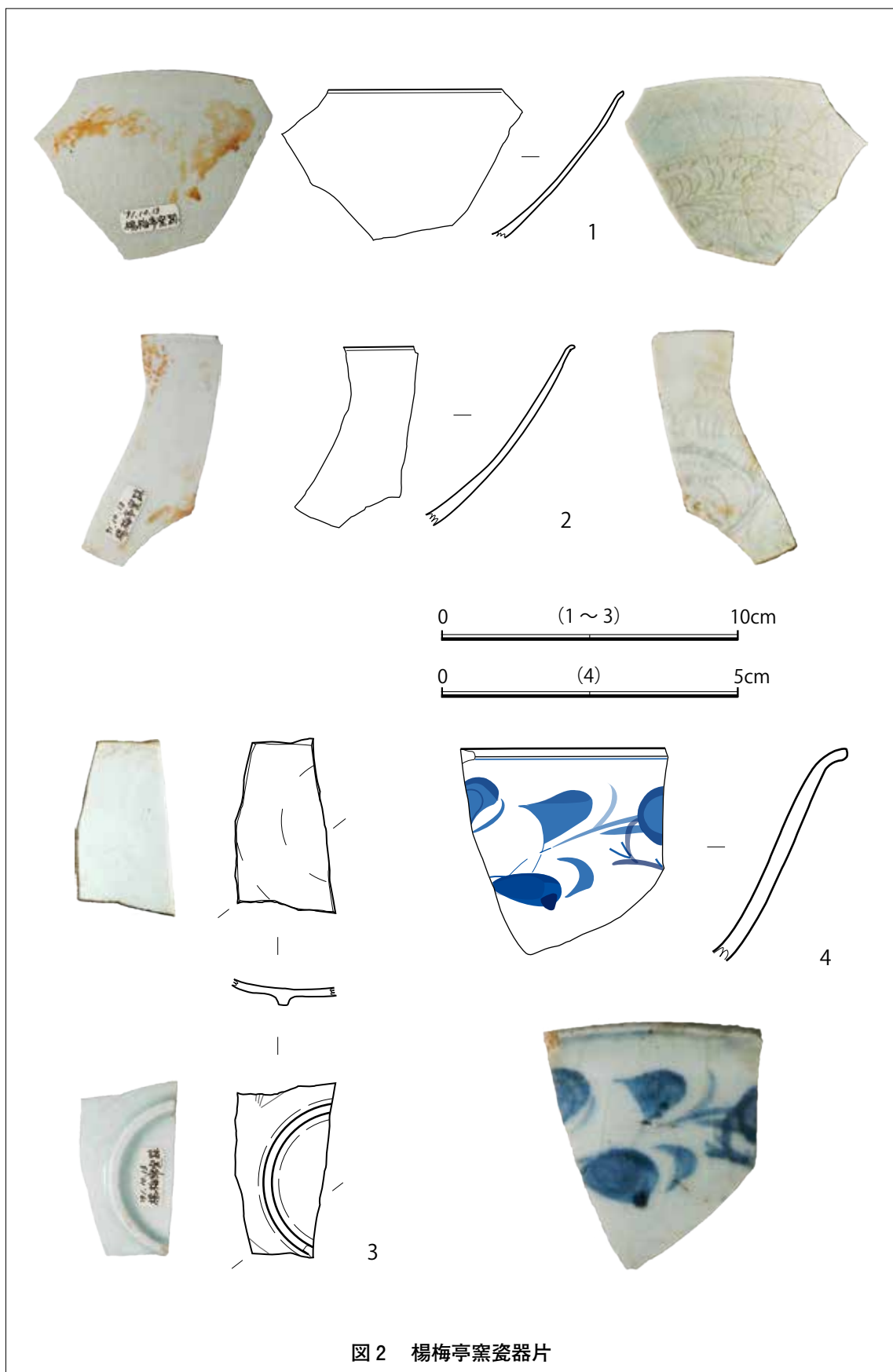


图2 楊梅亭窯瓷器片

3 景德鎮楊梅亭窯の研究略史

楊梅亭窯は、窯場の立地は景德鎮の南側の山麓に位置し、近在の湖田窯とともに一大窯業生産地としての景德鎮の成立期を物語る窯跡である。1959年に江西省重点文物保護單位に指定された。景德鎮を流れる昌江の三本の支流のうち南河の流域で最も早くから陶瓷器生産が展開し（江凌詹嘉 2010）、楊梅亭窯は湖田窯とともにその代表的窯である。

楊梅亭窯は景德鎮では比較的早くから窯址遺跡として知られ、1952年に景德鎮陶器館籌備処の呉良華が楊梅亭（勝梅亭）窯址、白虎湾（石虎湾）窯址⁽¹⁾でトチン・ハマを用いた「重合疊焼法」で焼成された碗・盤類を確認した（劉新園・白焜 1982）。1954年に陶器研究の第一人者で北京故宮博物院研究員だった陳万里、同じく北京故宮博物院研究員で陶器研究の気鋭の若手であった馮先銘らが、1953年に白虎湾窯址、1954年に楊梅亭窯址を現地踏査し報文を発表したことで、中国国内の陶器研究界で両窯址は広く知られるようになった（陳万里 1955；陳万里・馮先銘 1960）。

ただし、1950年代当時の陳万里・馮先銘らは、白虎湾窯・楊梅亭窯のいずれについても唐代の窯址遺跡とみなしていた。しかし1980年代以降、近在の湖田窯や、1950～1951年に南京博物院が発掘調査した南唐二陵の出土瓷器との比較検討の結果、楊梅亭窯は五代（10世紀前半）～宋代（13世紀後半）の窯址遺跡で、青瓷生産に始まり、さらに江南において白瓷を生産した最早期の窯址であり、また宋代以降には湖田窯とともに青白釉（影青釉）をかけた青白瓷を盛んに生産したと推断されるようになった（劉新園・白焜 1982）。

江西省文物工作隊漢明研究室副主任だった陳定栄は1980年代末～1990年代に幾度にもわたり楊梅亭窯の調査をおこなった。その結果、楊梅亭窯について、日常生活用器、文房具を中心とする器種構成や、製品には青瓷、白瓷、青白瓷があってその変遷過程が追えることなどが明瞭になった。すなわち、五代に生産を開始し、北宋初期の生産は小規模だったが、北宋中期から生産が盛んになり、南宋晩期に次第に衰退した。操業初期には青瓷を生産したが、まもなく白瓷、さらに青白瓷へと生産が移行した。製品の圈足部・脚部の溶着や変形を低減させるためにハマや輪トチンなどの窯道具を多用したことにその技術的特徴がある（陳定栄 1992）。1980年代後半からは、湖田窯の発掘調査が継続的におこなわれ実態判明が進む一方、楊梅亭窯にかんしては調査が深化することなく現在に至る。

4 本標本の資料的意義

このたび紹介した本学所蔵標本はわずか5点の破片であり、窯業史、美術史、歴史の各方面に大きな知見をもたらすものではない。しかしながら、①中国陶器史の重要な標識窯の日本国内における実物標本である、②胎や釉、文様などの特徴を観察・把握できる、③標本中に宋代青白瓷の嬰戲文碗という特徴的な製品がある、④おおむねの生産時期の判定が可能である、という点で学術標本としての資料的価値を十分にみとめられる。また、1点の小破片のみであるが青花瓷器が存在することは、楊梅亭窯にかんして認識を新たにしたところである。従来、一般的に楊梅亭窯は宋代までで衰退した窯とみられてきた。したがって、楊梅亭窯が明代以降にあって操業し青花瓷を焼成したか、あるいは宋代で衰退した「楊梅亭窯」とは別に、同じ場所において明代以降に青花瓷窯が営まれたか、という2つの可能性を考えることができる。このことは現地調査を経なければ推断が難しいが、景德鎮という一大窯業生産地の発展史を論じるうえで、標識窯のその後というテーマを提起する点で興味深い。

おわりに

佐賀県立有田窯業大学校旧蔵陶磁器は総数約800点にもものぼるが、その点数や資料構成の全体像はまだ精確につかめていない。しかしながら、資料整理の目途は次第に立ちつつあるため、本稿を手始めとして、今後は併行して少しずつ資料化と公表・公開を進めたいと考えている。学内外からの資料利用のきっかけとなることを期待したい。

注

(1) 陳万里ら故宮博物院の研究者は「勝梅亭」、「石虎湾」と表記するが、景德鎮や江西省の研究者は現地での呼称により「楊梅亭」、「白虎湾」と呼ぶ。筆者も現地の呼称を尊重する立場から後者にしたがう。

引用・参考文献

- 江西省博物館 2016『江西宋代紀年墓与紀年青白瓷』、文物出版社
- 江西省文物考古研究所・景德鎮民窯博物館 2007『景德鎮湖田窯址 1988-1999年考古發掘報告』、文物出版社
- 江凌詹嘉 2010「五代時期景德鎮瓷業分布狀況及特徵」『滄桑』2010年第1期、pp.101-102
- 陳定栄 1992「江西景德鎮楊梅亭古瓷窯」『東南文化』1992年第2期、pp.267-276
- 陳万里 1955「最近調査古代窯址所見」『文物參考資料』1955年第8期、pp.111-113
- 陳万里・馮先銘 1960「故宮博物院十年來對古窯址的調查」『故宮博物院院刊』総2期、pp.104-126
- 范鳳妹・吳志紅 1983「江西宋代紀年墓出土的青白瓷器」『南方文物』1983年第1期、pp.77-79
- 馬嘉璇 2018「宋代景德鎮窯嬰戲紋淺析」『收藏家』2018年第7期、pp.95-100
- 毛小龍・李紹蘭 2009「宋湖田窯青白瓷嬰戲紋碗紋飾探究」『美術大觀』2009年第2期、p.25
- 劉新園・白焜 1982「高嶺土史考一兼論瓷石、高嶺与景德鎮十至十九世紀的製瓷業」『中国陶瓷』1982年第7期